

March 2026
会員連絡 No.34

The Society of Cardiovascular Endocrinology and Metabolism

日本心血管内分泌代謝学会

- ご挨拶：理事長交代の挨拶／役員退任・就任の挨拶
- ご案内：第30回日本心血管内分泌代謝学会学術総会
- ご報告：第29回日本心血管内分泌代謝学会学術総会
受賞者紹介 高峰譲吉賞／高峰譲吉研究奨励賞／永井良三賞／
若手研究奨励賞／若手研究助成
第29回評議員会・総会
- 各種名簿

日本心血管内分泌代謝学会
事務局

〒600-8441 京都市下京区新町通四条下る四条町343番地1
タカクラビル6階 一般社団法人日本内分泌学会 内
TEL：075-354-3562 FAX：075-354-3561 E-mail：cvem@endo-society.or.jp



目次

理事長交代ご挨拶	2
第30回日本心血管内分泌代謝学会学術総会開催のご挨拶	5
役員退任・就任のご挨拶	6
第29回日本心血管内分泌代謝学会学術総会 開催報告	15
第29回日本心血管内分泌代謝学会受賞者プロフィール	
・第29回高峰譲吉賞	17
・第29回高峰譲吉研究奨励賞	19
・第5回永井良三賞	21
・第29回若手研究奨励賞	23
・2025年度若手研究助成	28
名簿	
理事・監事・幹事	30
名誉会員	31
功労評議員	31
評議員	32
2025年度新入会会員	32
第29回日本心血管内分泌代謝学会評議員会・総会議事録	33

吉村 道博 先生（横須賀市立総合医療センター 顧問）



略歴

昭和 61 年（1986 年） 宮崎医科大学 卒業
平成 5 年（1993 年） 熊本大学大学院医学研究科 修了
平成 13 年（2001 年） 熊本大学医学部循環器内科 助教授
平成 19 年（2007 年） 東京慈恵会医科大学内科学講座循環器内科
講座担当教授
平成 25 年（2025 年） 東京慈恵会医科大学 名誉教授
横須賀市立総合医療センター 顧問

このたび、私こと日本心血管内分泌代謝学会（CVEM）第九代理事長としての任期を満了し、退任いたしましたことを謹んでご報告申し上げます。

理事長就任以来、学会の更なる飛躍を期し、微力ながら職責の遂行に努めてまいりました。ここに至るまで、九州大学・小川佳宏先生には副理事長として多大なるご支援を賜り、心より感謝の意を表する次第です。

在任中は、前理事長・伊藤裕先生の理念「内分泌至上主義」を継承し、「ホルモンが紡ぐ臓器連関」を標語として掲げ、心血管疾患の病態理解における内分泌・代謝の重要性を広く啓発することに尽力してまいりました。こうした活動を通じて、本学会が日本内分泌学会の分科会としての位置づけを保ちつつ、循環器領域より臓器連関の意義を力強く発信する場であることを、改めて認識いたしました。

また、学術総会においては、参加者の熱意溢れる討議に触れ、学会の求心力と学術的価値の高さを実感いたしました。回を重ねるごとに盛況を呈し、心血管・内分泌・代謝の各領域を横断する知の融合への関心の高まりを肌で感じております。第 28 回（令和 6 年）は小川佳宏先生、第 29 回（令和 7 年）は田村功一先生が会長を務められ、本学会は着実に発展の歩みを進めております。

研究奨励制度につきましては、高峰譲吉賞、高峰譲吉研究奨励賞、若手研究奨励賞（YIA）が従来通り継続されております。さらに、中尾一和先生（トランスレーショナルリサーチ領域）、永井良三先生（システム研究領域）のご厚意とご支援により、両先生のお名前を冠した賞の継続が本年度正式に決定され、若手研究者支援の枠組みが安定的に維持されることとなりました。加えて、若手研究助成（YIG）も順調に継続しており、第 29 回学術総会では、優秀ポスター発表に対する表彰が新たに実施されました。このように、先達のご尽力により本学会には格式高き賞が揃っていることを誠に光榮に存じます。これらの制度は、学会の将来を担う人材育成の礎となるものと確信しております。

加えて、若手層を含む幅広い層への情報発信の一環として、動画配信の導入を現在計画中です。とりわけ本学会の特色を外部に明快に伝えることを目的に、YouTube を活用した「CVEM-TV」企画の立ち上げを構想しております。この試みにより、学会の理念や活動が広く社会に共有され、次世代研究者層への関心喚起と参加促進の一助となることを期待しております。

今後とも本学会が、領域横断的な知の交流を牽引する場として、さらなる飛躍を遂げられることを心より祈念いたします。

結びに、在任中に賜りましたご厚情に対し、深甚なる謝意を表するとともに、今後は功労評議員として、引き続き微力ながら本学会に貢献してまいり所存です。何とぞ、変わらぬご支援とご指導を賜りますよう、お願い申し上げます。

理事長就任の御挨拶

九州大学大学院医学研究院病態制御（第三内科） 主幹教授

小川 佳宏



略歴

昭和 62 年（1987 年）	京都大学医学部医学科卒業
平成 5 年（1993 年）	京都大学医学部附属病院 医員
平成 6 年（1994 年）	日本学術振興会 特別研究員
平成 9 年（1997 年）	京都大学医学部附属病院内分泌・代謝内科 助手
平成 15 年（2003 年）	東京医科歯科大学難治疾患研究所 教授
平成 23 年（2011 年）	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 教授
平成 28 年（2016 年）	九州大学大学院医学研究院 教授
令和 4 年（2022 年）	九州大学 主幹教授

2025 年 9 月より、日本心血管内分泌代謝学会（The Society of Cardiovascular Endocrinology and Metabolism, The CVEM Society）の第 10 代理事長を拝命しました九州大学大学院医学研究院病態制御（第三内科）の小川佳宏です。同時に就任された信州大学医学部循環器内科学教室の桑原宏一郎副理事長と力を合わせて本学会の発展に尽力します。会員の先生方におかれましては、御支援の程、宜しくお願い申し上げます。

前世紀末には、ナトリウム利尿ペプチドファミリー、一酸化窒素、エンドセリン、アドレノメデュリンなどの心血管ホルモンが次々に単離・同定されました。この領域におけるわが国の研究者の貢献は著しいものがあり、「心血管内分泌代謝学」は日本発の新しい内分泌学の研究領域として誕生しました。これらのホルモンの多くは心血管疾患を中心に診断薬あるいは治療薬として広く臨床応用に至っています。

私は 1987 年に京都大学医学部を卒業し、井村裕夫教授、中尾一和教授の御指導の下、大学院博士課程の最初のテーマとしてナトリウム利尿ペプチドファミリーの臨床的意義に関する分子医学的研究に従事しました。本学会の創立時（1997 年）には、京都大学医学部附属病院の助手（現在の助教）として内分泌代謝学の臨床と研究に従事していましたが、心血管内分泌代謝学という新しい研究領域が出来上がる頃の熱気を鮮明に記憶しています。世代を超えて異なる専門性の研究者が競うように集い、心血管疾患と内分泌代謝学の境界領域が大きく盛り上がりました。CVEM（シー・ブイ・イー・エム）という略語が合い言葉となり、新しい学会組織が出来上がる黎明期の目撃者としての経験は忘れがたいものです。

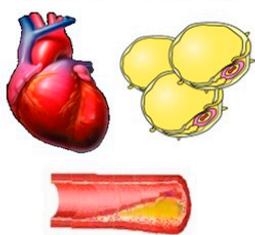
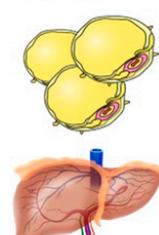
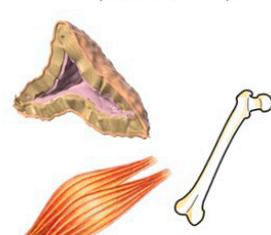
CVEM の誕生から 30 年が経ち、医学・医療の現場も大きく変わりました。時代が進むにつれ、CVEM の持ち場も心血管疾患のみならず広く内分泌代謝疾患をカバーするようになりました。私自身も所属機関の異動に伴って、研究テーマが目まぐるしく変わり、脂肪組織由来ホルモンであるレプチンから慢性炎症・エピゲノム制御、最近では副腎皮質と生活習慣病に関する研究へと広がっています。一方、近年の臨床研修制度・専門医制度の改革もあり、医学・医療が専門

分化・細分化し、臓器・疾患別に特化した臨床・研究が増えていますが、専門性を越えて全身を俯瞰してシステム全体を議論する機会が減ったように思われます。日本の研究力の地盤沈下が叫ばれて久しいですが、臓器・疾患特異的であり、高い専門性が求められる循環器病学・腎臓病学と全身の恒常性維持機構であり、臓器・疾患横断的な内分泌代謝学が縦糸と横糸のように交差して誕生した CVEM は、異分野融合による新しい研究領域のプロトタイプとして、日本の研究力の V 字回復の起爆剤になる可能性があります。研究現場はすさまじいスピードで変化していますが、次の時代を担う若手世代には、前例にとらわれず、新しい課題に果敢に挑戦して欲しいと思います。

CVEM が分科会として属する日本内分泌学会は 2026 年に創設 100 周年を迎えます。長い内分泌学の歴史においても日本発の CVEM はユニークな位置を占めるものであり、100 周年記念事業でも大きく取り上げられる予定です。2026 年 6 月の日本内分泌学会創設 100 周年記念式典に合わせて国際内分泌学会 (International Society of Endocrinology) の学術集会である第 22 回国際内分泌学会議 (ICE2026) と第 99 回日本内分泌学会学術総会 (JES2026) が合同開催されます (ICE2026/JES2026) (共同会長：柴田洋孝教授、小川佳宏)。ICE2026/JES2026 のテーマは「Enlightened Endocrinology in Unprecedented Times (異次元の時代における進化する内分泌学)」です。ICE2026/JES2026 には多くの CVEM 研究者が世界中から結集し、最先端の議論が交わされます。現地の創設 100 周年記念式典には、日本内分泌学会会員あるいは ICE2026/JES2026 の参加登録者であれば入場可能であり、創設 100 周年を記念して、日本内分泌学会会員の ICE2026/JES2026 の参加登録費は国際学会としては破格の安値に設定されています。CVEM の会員の皆様には是非とも奮ってご参加いただければ幸いです。

CVEM のコンセプトを体現された高峰譲吉先生はわが国の内分泌学の黎明期に世界を股に掛けて躍動されました。日本内分泌学創設 100 周年を迎える節目の時期に、第二・第三の高峰譲吉先生を輩出するような新しい CVEM にしたいと考えています。会員の皆様の益々の御支援を宜しくお願い申し上げます。

新しい内分泌代謝学を求めて！

京都大学 大学院医学研究科 (1989～2023)	東京医科歯科大学 難治疾患研究所 大学院医歯学総合研究科 (2003～2019)	九州大学 大学院医学研究院 (2016～)
		
Na利尿ペプチドファミリー レプチン	慢性炎症 エピゲノム制御	古典的内分泌器官 ストレス応答
循環器疾患・高血圧・糖尿病・肥満 メタボリックシンドローム		古典的内分泌疾患 骨粗鬆症・サルコペニア

第30回 日本心血管内分泌代謝学会 学術総会開催のご案内

会長 益崎 裕章

琉球大学 大学院医学研究科 内分泌代謝・血液・膠原病内科学講座（第二内科）教授

副会長 桑原 宏一郎

信州大学 医学部内科学第五・循環器内科 教授

日本心血管内分泌代謝学会会員の皆様におかれましては益々の御盛栄のことと御慶び申し上げます。第30回（2026年度）日本心血管内分泌代謝学会学術総会の会長を担当させて頂くことになりましたので御挨拶申し上げます。

初めに、このような栄えある機会を与えて戴きました前理事長の吉村道博先生、現理事長の小川佳宏先生に厚く御礼申し上げます。

日本心血管内分泌代謝学会は日本内分泌学会の分科会として大きな発展を遂げ、領域・分野横断的な先駆的かつ斬新な研究成果を数多く発信し、多数の研究者・臨床家を育成し、魅了してまいりました。このような経緯と背景を踏まえ、今回の学術総会のテーマを『Interdisciplinary ScienceとしてのCVEM：その魅力と深遠を堪能する』とさせて頂きました。可能な限り、若手の研究者・臨床家の先生方の登壇機会を増やし、分野横断的で洞察と刺激に溢れた活発な議論が盛り上がる学会を目指したいと考えております。

会期は2026年12月19日（土）の早朝から夕刻までの終日、会場は那覇国際空港からモノレールあるいはタクシーで約15分の場所に位置する沖縄県市町村自治会館です。

循環器領域の基礎・臨床研究の権威でいらっしゃいます信州大学医学部内科学第五・循環器内科の桑原宏一郎教授に副会長を御願ひして特に循環器領域・腎臓領域・血管医学領域のプログラムの充実を期する態勢を整えており、特別講演には順天堂大学大学院医学研究科 循環器内科学の南野徹教授を御迎えします。

30回にわたる日本心血管内分泌代謝学会学術総会のあゆみの中で沖縄開催は初めてとなります。本州では師走の寒さが身にこたえる季節、温暖な南の地でリラックスした雰囲気の中、御参加の皆様はCVEMの魅力と深遠を堪能して戴けますよう、事務局一同、琉球大学大学院医学研究科内分泌代謝・血液・膠原病内科学講座（第二内科）教室員・同門会員一同、心を込めて準備を進めてまいり所存で御座います。日本心血管内分泌代謝学会会員の皆様の多数の御参加を御待ち申し上げます。

末筆ながら皆様の御健康と一層の御発展を御祈り申し上げます。

令和8年3月吉日

CVEM 2026
30th Annual Meeting
of the Society
for Cardiovascular
Endocrinology and
Metabolism

Interdisciplinary Science
としてのCVEM
～その魅力と深遠を堪能する～

第30回
日本心血管内分泌代謝学会学術総会

◆会期 2026年12月19日（土）
◆会場 沖縄県市町村自治会館
〒900-0029 沖縄県那覇市旭町1-16-37

◆会長 益崎 裕章
琉球大学大学院医学研究科
内分泌代謝・血液・膠原病内科学講座
（第二内科）教授

◆副会長 桑原 宏一郎
信州大学医学部
循環器内科学教室 教授

主催事務局
琉球大学大学院 医学研究科 内分泌代謝・血液・膠原病内科学講座（第二内科）
〒901-2220 沖縄県那覇市浦元1-1076
事務局長：本間 健一郎

QRコード

〒812-0016 広島市東区藤原1-3-5
〒305-8585 千葉県市川市栄町1-1-1
TEL:092-437-4118 FAX:092-437-4182
E-mail:cvem2026@clinkage.co.jp

深水 昭吉 先生 (筑波大学 特命教授 (生存ダイナミクス研究センター、高等研究院))



略歴

- 1983年 筑波大学第二学群農林学類 卒業
- 1987年 筑波大学遺伝子実験センター助手
- 1990年 筑波大学応用生物化学系講師
- 1994年 米国 SALK 生物学研究所研究員
- 1999年 筑波大学先端学際領域研究センター教授
- 2015年 第19回 高峰譲吉賞 (日本心血管内分泌代謝学会)
- 2021年 日本生化学会会頭
- 2022年 第17回 柿内三郎記念賞 (日本生化学会)
- 2023年 文部科学大臣表彰 科学技術賞 (研究部門)
- 2025年 筑波大学 特命教授 (生存ダイナミクス研究センター、高等研究院)
- 2026年 第10回 生体の科学賞 (公財 金原一郎記念医学医療振興財団)

このたび、2025年9月の第29回日本心血管内分泌代謝学会 (CVEM: 田村功一会長) の学術総会におきまして理事を退任いたしました。長きにわたり学会活動に携わることができましたのは、ひとえに諸先生方、会員の皆様の温かいご支援とご厚誼のお陰であり、心より御礼申し上げます。

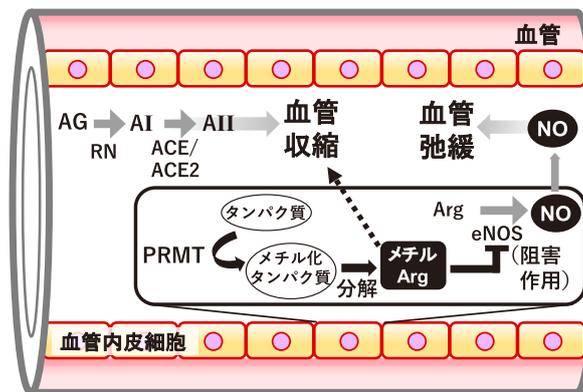
私が本学会に参画した当初より、心血管系と内分泌・代謝系のクロストークに着目した統合的研究が注目を集めるようになりました。その中で私たちは、心血管調節因子として、特に、レニン・アンジオテンシン系やタンパク質翻訳後修飾に着目し、アルギニンメチル化酵素 PRMT を中心とした転写制御・エピゲノムネットワークおよびストレス応答との連関を明らかにしてきました。我々の研究が、心血管恒常性の理解を一步進める (one piece を埋めた) ものであったならば大変有難く、学会活動を通じて多くのフィードバックを頂けたことにとっても感謝しております。これらの研究は、多くの卒業生たちに人生の一時期に集中して取り組んでいただいた成果として生み出されたものであり、彼らが現在では社会で、そして世界で活躍していることを、何より誇りに思います。私にとりまして、日本心血管内分泌代謝学会は、ここで研究活動をしてきて本当に良かったと体感できる学会でした。

今後の本学会には、従来の枠を超えて分子・細胞・個体レベルを統合する視点はもちろんのこと、さらには AI や *in silico* human などのデジタルツイン技術をも包含するダイナミックな、現時点では想像も及ばない、ワクワクするような“未来科学”としての展開を大いに期待しております。また、若手研究者の皆さんには、基礎と臨床の「狭間」にこそ独創と希望の芽があること、そして現象に対する「なぜ？」の発想を常に持ちながら、世界を超えていく視野を身に付けていただけたらと思います。学会活動の場を積極的に活用して人的ネットワークを広げ、自らの専門領域を深めると同時に、分野横断的な視点も持ち合わせ、誰も見たことのない「現象の奥にある根本原理」を追究する姿勢を大切にして、挑戦を続けていただきたいと願っています。

末尾になりますが、私の留学先の SALK Institute for Biological Studies に刻まれている創設者・Jonas SALK 博士の希望の「言葉」を皆さんと共有したいと思います。

Hope lies in dreams, in imagination and in the courage of those who dare to make dreams into reality.

本学会の益々のご発展と、皆様のご健勝・ご活躍を心より祈念申し上げます。



心血管系調節因子

eNOS : 一酸化窒素 (NO) 合成酵素、PRMT : Arg メチル化酵素
RN : レニン、ACE/ACE2 : アンジオテンシン変換酵素
AG : アンジオテンシノーゲン、AI, AII : アンジオテンシンI、II

岸 拓弥 先生（国際医療福祉大学大学院医学研究科循環器内科 教授）



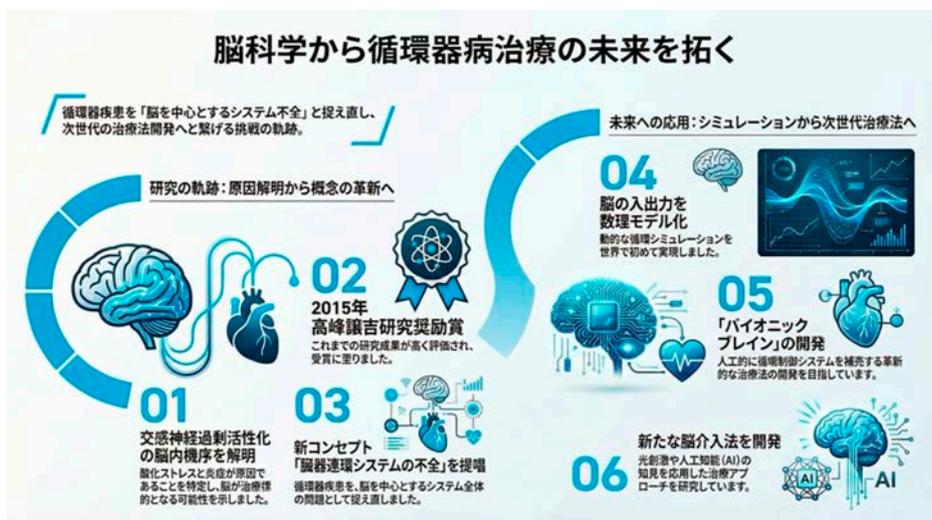
略歴

平成 9 年（1997 年）九州大学医学部 卒業
平成 14 年（2002 年）九州大学大学院医学系研究科臓器機能医学専攻
修了
平成 26 年（2014 年）九州大学大学院医学研究院先端心血管治療学講
座 准教授
平成 27 年（2015 年）九州大学循環器病未来医療研究センター部門長
平成 31 年（2019 年）国際医療福祉大学大学院医学研究科循環器内科
教授

この度は日本心血管内分泌代謝学会の理事に就任することとなりました。浅学非才な上に未だ何も成し遂げられていない私には身に余る光栄です。

私はこれまで、高血圧や慢性心不全、メタボリックシンドロームや糖尿病における交感神経活性化の脳内機序に関する研究を一貫して行ってきました。脳内一酸化窒素産生系の低下およびアンジオテンシンⅡ受容体活性化による酸化ストレス増加、さらには炎症性経路が交感神経を過剰活性化する因子であることを報告し、高血圧や慢性心不全における脳を治療標的として交感神経抑制を介して治療できる可能性を示してきました。また、これらの異常の首座が神経グリア連環不全であることを解明しました。これまでの研究が2015年に本学会の高峰譲吉研究奨励賞を受賞できたことは、大変励みになっています。さらに「循環器疾患は脳を中心とする臓器連環による循環動態動的恒常性システムの不全である」のコンセプトを提唱し、脳の入出力関係を数理モデル化することで動的な循環シミュレーションを行うことに成功しました。この成果を応用した人工的に循環制御システムを補完するバイオニックブレイン開発や、脳への介入法として光刺激の開発研究を行なっています。また、人工知能の研究にも長年とりくんでいます。なお、SNSを用いた医療情報発信では医療業界では第一人者とされており、この方面でも本学会に貢献できればと思っています。

本学会は大学院生時代から参加・発表する機会をいただくことができ、大変勉強になるとともに、他の研究から多くのことを学ぶことができました。また、本質的でハイレベルの議論が活発に繰り広げられることは他の学会にはない特徴です。そのような本学会のさらなる発展に私が寄与できるのであれば、この上ない喜びです。理事の名に恥じないよう、自分の世界をさらに深めて行きます。よろしく願い申し上げます。



曾根 正勝 先生（聖マリアンナ医科大学 代謝・内分泌内科学講座）



略歴

平成 8 年	京都大学医学部 卒業
平成 9 年	静岡市立静岡病院 内科研修医
平成 16 年	京都大学大学院医学研究科 医学博士学位取得
平成 16 年	日本学術振興会特別研究員（PD）
平成 18 年	京都大学医学部附属病院 内分泌代謝内科 助教
平成 23 年	京都大学医学部附属病院 同 特定講師
平成 27 年	京都大学医学研究科 糖尿病・内分泌・栄養内科 特定准教授
令和 2 年	聖マリアンナ医科大学 代謝・内分泌内科 主任教授

日本心血管内分泌代謝学会（CVEM）の理事を務めさせていただくことになりました曾根正勝です。私は、ナトリウム利尿ペプチドなどの心血管ホルモンの研究を通じて医学研究の世界に入り、液性因子が血管に及ぼす作用の研究から始まり、ヒト ES 細胞や iPS 細胞から血管構成細胞の分化の誘導、その技術を用いた疾患 iPS 細胞を用いた血管障害の病態解明なども行ってまいりました。また、臨床面では副腎疾患をはじめとする内分泌疾患や糖尿病の診療に携わり、原発性アルドステロン症などのホルモン過剰症や糖尿病などの代謝異常が心・血管・腎にどのような障害を及ぼすかの臨床研究も行ってまいりました。これまでの研究や臨床での活動内容と関連が深い CVEM の学会運営に参画させていただけること、誠に光栄に存じます。

CVEM は、循環器、内分泌代謝、腎臓など様々な専門領域の先生方が参加する学際分野の学会になります。心臓・血管・腎臓など循環器臓器はホルモンや代謝を通じてお互いに連関して制御されており、この領域を一体として捉えつつ、それぞれの専門領域から多様なアプローチをすることで、特定の専門領域の研究者が集まる学会に比べ病態の新しい捉え方や解釈が生まれる可能性のある、創造的な学会であると考えています。今後の CVEM の発展に少しでも寄与できましたら幸甚です。

徳留 健 先生（横浜市立大学医学部 薬理学教室）



略歴

平成 8 年（1996 年）香川医科大学医学部医学科卒業
平成 12 年（2000 年）香川医科大学大学院博士課程修了
平成 18 年（2006 年）国立循環器病センター研究所 高血圧研究室長
平成 22 年（2010 年）国立循環器病センター研究所 生化学部 室長
令和 4 年（2022 年）国立循環器病センター研究所 心不全病態制御部 室長
令和 5 年（2023 年）横浜市立大学医学部 薬理学教室 主任教授（現職）

日本心血管内分泌代謝学会の諸先生方には平素より御指導賜り、有難うございます。このたび本学会の理事を拝命することとなりました。大変光栄であると同時に、身の引き締まる思いです。尊敬する偉大な諸先輩方が創設・牽引してこられた本学会の、さらなる飛躍に貢献できますよう努力致します。私が研修医であった 1990 年代は、CNP・アドレノメデュリン・レプチン・オレキシン・グレリン等のペプチドホルモンが発見されたほか、ANP・BNP が臨床応用された時期です。私は臨床研究で学位を取得しましたが、これらペプチドホルモンの基礎研究を行いたいと強く願った結果、寒川賢治先生が主宰されていた国立循環器病センター研究所の生化学部で学ぶ機会を頂きました。国循で約 20 年間研究させて頂きましたが、その間に本学会若手研究奨励賞と高峰譲吉研究奨励賞を受賞しました。私はペプチドホルモンの臓器保護作用について研究して参りましたが、サクビトリルバルサルタンが 2020 年に慢性心不全に対して、2021 年には高血圧に対して保険適応となったことは、大変大きな喜びでした。現在は横浜の地で内分泌－神経－免疫関連に注目して研究しておりますので、引き続き御指導・御鞭撻の程、何卒宜しくお願い致します。

ナトリウム利尿ペプチドの臓器保護効果



ANP・BNPの心肥大・心線維化抑制作用

(Circulation 2005, Circulation 2008, Circ. Res 2018, Circulation 2020)

CNPの心筋梗塞後リモデリング抑制作用

(Endocrinology 2002, Endocrinology 2003, J. Am. Coll. Cardiol 2005)



ANP・BNPの糸球体・尿細管保護作用

(J. Am. Soc. Nephrol 2012, Anesthesiology 2018, Kidney. Int 2023)

ANP・BNPの腎間質線維化抑制作用

(Clin. Exp. Nephrol 2015)



ANP・BNPの血管再生促進作用

(Arterioscler. Thromb. Vasc. Biol 2009, Endocrinology 2016)

ANP・CNPの血圧恒常性維持作用

(Hypertension 2016, Hypertension 2022)

有馬 勇一郎 先生（熊本大学国際先端医学研究機構 心臓発生研究室）



略歴

2004年 熊本大学医学部卒
2013年 東京大学医学博士（栗原裕基教授）
2013年 熊本大学 循環器内科（小川久雄教授）
2016年 国立循環器病研究センター研究所 上級研究員（中川修部長）
2017年 熊本大学 循環器内科 助教（辻田賢一教授）
2021年 熊本大学 国際先端医学研究機構 特任准教授（主任研究員）
2025年 熊本大学 大学院生命科学部 形態構築学講座 准教授（主任研究員）

このたび日本心血管内分泌代謝学会の諸先生のご厚意により、監事に推挙いただきましたことを心から感謝申し上げます。

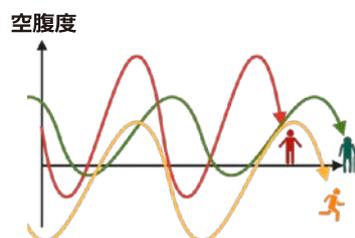
私は2004年の熊本大学卒業です。小川久雄教授の指導のもとで循環器内科医としての研鑽を積み、2009年から東京大学代謝生理化学教室の栗原裕基先生のもとで基礎研究を学びました。栗原先生とお会いしたのは私が医学部の学生の頃ですが、その際に栗原先生より吉村道博先生をご紹介いただき、循環器内科を志望するに至りました。改めて、本学会と関わりの深い先生方とのご縁を感じております。

本学会との直接的な関わりは、学術集会に参加するようになった、大学院の頃より始まりました。参加するたびに、高いレベルの研究発表に触れては驚かされながらも、本会での学会発表が一つの目標となり、平成24年に開催された第16回の本会学術総会では、若手研究奨励賞（YIA）を受賞することができたことが、大きな励みとなりました。

学位取得後、再び熊本大学循環器内科に臨床医として復帰しましたが、自分なりのサイエンスを見つけていきたいとの思いは強く、中川修先生や辻田賢一先生のご指導もいただきながら、2021年より熊本大学国際先端医学研究機構でPIとして独立し、2025年8月からは熊本大学 生命科学部形態構築学講座に籍を移して、解剖学・発生学を中心とした医学科学生の教育にも関わることとなりました。

最近の現在の関心はケトン体代謝の持つ多面的な作用ですが、大学院時代に学んだ発生学的視点を、形態形成のみならず疾病治療・予防にも応用していきたいと考えております。ケトン体代謝の持つ本質的な意義を見出しながら、自分自身のサイエンスを育て、興味を持つ後進の発掘・育成も担ってまいりたいと気持ちを新たにしているところです。

振り返ると、私のキャリアのさまざまなステップで、本学会との縁を感じます。Physician scientistとして、サイエンスを実践する楽しさといったものを、次の世代にも伝えていけるよう努力してまいりたいと思います。引き続き、学会会員の諸先生のご指導・ご鞭撻をお願い申し上げます。



それぞれの生き方や背景に応じた、最適な空腹パターンがあるはず！！

ケトン体代謝の多面的な作用を理解しながら、空腹に伴う体の変化を理解していきたいと研究を進めてまいります。

田中 智洋 先生（名古屋市立大学 消化器・代謝内科学分野）



略歴

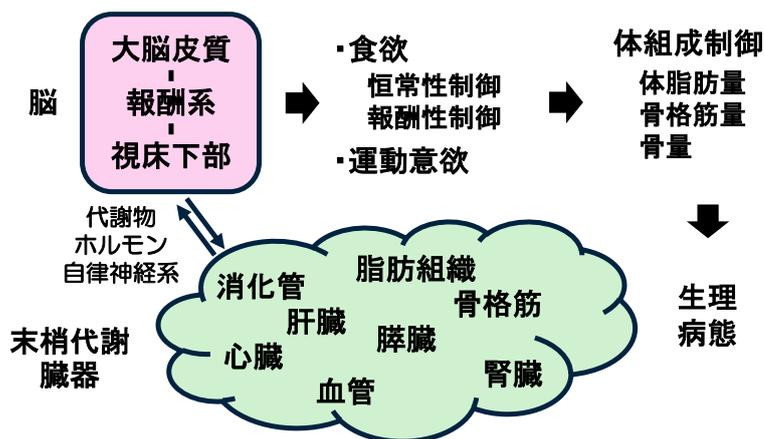
- 1998年 京都大学医学部 卒業
- 2006年 京都大学博士（医学）（臨床病態医科学・内分泌代謝内科）
（中尾一和教授）
- 2009年 京都大学医学研究科 腫瘍生物学講座 助教（鍋島陽一教授）
- 2011年 財）先端医療センター研究所 主任研究員
- 2012年 京都大学医学研究科 メディカルイノベーションセンター
特定准教授
- 2017年 名古屋市立大学医学研究科 消化器・代謝内科学分野 准教授
- 2018年 名古屋市立大学病院 内分泌・糖尿病内科 部長（兼務）
- 2025年 名古屋市立大学病院 病院長補佐（医療の質担当）（兼務）

このたび日本心血管内分泌代謝学会の幹事を拝命することとなりましたこと、身に余る光栄に存じますと同時に、重責に身の引き締まる思いでございます。

私は平成10年（1998年）に京都大学医学部を卒業すると同時に、中尾一和教授が主宰される臨床病態医科学・内分泌代謝内科（旧内科学第二講座）に入局し、大学院では分子医学グループ小川佳宏先生のご指導のもと、現在の主要研究テーマでもある、肥満・肥満症における「レプチン抵抗性」の分子病態の解明に取り組みました。また世界初となる脂肪萎縮症へのレプチン補充療法の国内薬事承認・発売に繋がるトランスレーショナル医学研究にも参加させて頂く機会を頂きました。

その後、京都大学腫瘍生物学（旧病理学第二講座）および先端医療センターにおいて鍋島陽一先生のもと、Klothoファミリー分子による栄養・代謝制御の分子病理学的研究の機会を頂き、分子の機能解析に基づく病態生理学の重要性を学ばせて頂きました。ご縁を頂いて2017年に名古屋市立大学に異動後は、心・脳・腎・血管疾患の基盤病態としての体組成異常症、すなわち肥満とサルコペニアの病態解明を目指す研究に軸足を置き、これを制御する脳と末梢代謝臓器の機能連関の解析を中心的テーマとして（図）、研究と診療の実践により得られる知の創出を目指し活動を行っております。

本学会では、これまで多くの会員の先生方に親身にご指導を頂いて育てて頂き、2007年度には若手研究奨励賞、2018年度には高峰譲吉研究奨励賞を授与頂きました。はなはだ僣越かつ微力ではございますが、心血管内分泌代謝学の面白さ、奥深さを、より多くの方々に伝え、本学会のさらなる発展にわずかながらでも貢献できるよう、粉骨砕身、努めて参存です。先生方のより一層のご指導を伏してお願い申し上げます。



横井 秀基 先生 (熊本大学大学院生命科学研究部 腎臓内科学講座)



略歴

平成 7 年 (1995 年) 京都大学医学部医学科卒
平成 17 年 (2005 年) 京都大学博士 (医学)
平成 18 年 (2006 年) 京都大学大学院医学研究科 内分泌代謝内科
特任助手
平成 26 年 (2014 年) 京都大学大学院医学研究科 腎臓内科学 助教
平成 28 年 (2016 年) 京都大学大学院医学研究科 腎臓内科学 講師
令和 6 年 (2024 年) 京都大学大学院医学研究科 腎臓内科学 准教授
令和 6 年 (2024 年) 熊本大学大学院生命科学研究部
腎臓内科学講座 教授

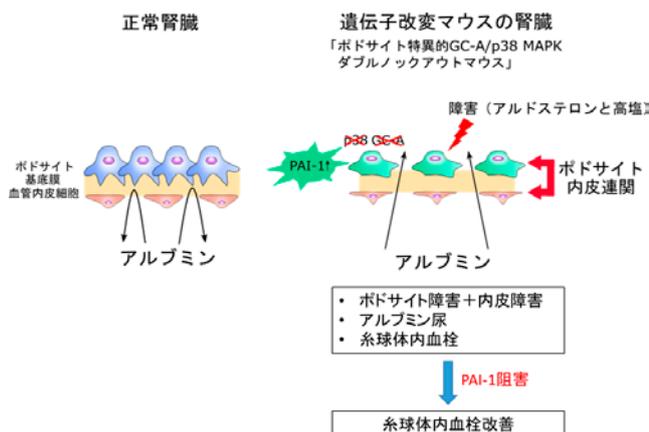
このたびは吉村道博前理事長をはじめ日本心血管内分泌代謝学会の諸先生方のご厚意により幹事にご推挙いただきましたことを心より御礼申し上げます。

私は平成 7 年京都大学卒で、中尾一和先生が主宰されていた京都大学第二内科で研鑽を積みました。当時の第二内科は内分泌、糖尿病、腎臓、心臓、高血圧、膠原病など多くのグループが一体となって活動しており、広い内科の学びの中で腎臓病に興味を持ち、腎臓グループに所属しました。大学院では、向山政志先生のご指導のもと connective tissue growth factor (CTGF) をはじめとする腎線維化に関する研究に取り組み、学位を取得しました。その後も京都大学内分泌・代謝内科で、ナトリウム利尿ペプチド系の腎保護作用の解明を進めてまいりました。その後京都大学の講座再編により腎臓内科学の教員として、腎臓病・透析の臨床・研究に携わってまいりました。

令和 6 年より現職を拝命し、研究においては腎臓病・腹膜透析の病態解明ならびにトランスレーショナルリサーチを目指しております。ARNI やフィネレノンの腎疾患に対する基礎的研究もすすめており、腎臓・心臓・内分泌代謝と多くの学際領域におけるナトリウム利尿ペプチドやアルドステロン／ミネラルコルチコイド受容体系の役割の理解をさらに発展させたいと考えております。

諸先生方のご指導と御鞭撻を賜りながら、本学会の発展に微力ながら貢献できるように努めてまいります。今後ともご指導ご支援の程、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

ポドサイト特異的GC-Aおよびp38 MAPKのダブルノックアウトマウスは、アルドステロン、高塩負荷によりポドサイト障害と糸球体係蹄内血栓を示す



心腎代謝連関の研究と臨床：伝統と革新の、その先へ

会 長 田 村 功 一

(横浜市立大学医学部 循環器・腎臓・高血圧内科学 主任教授)
(横浜市立大学附属市民総合医療センター 病院長)

副 会 長 石 上 友 章

(横浜市立大学附属病院 循環器内科 教授)

事務局長 小豆島 健 護

(横浜市立大学医学部 循環器・腎臓・高血圧内科学 講師)

2025年9月27日(土)・28日(日)の2日間にわたってパシフィコ横浜ノースにて第29回日本心血管内分泌代謝学会学術総会(CVEM2025)を開催させていただきました。本総会が横浜で開催されるのは、当教室前任の主任教授の梅村 敏横浜市立大学名誉教授を会長として2014年11月21日(金)・22日(土)に横浜市開港記念会館にて第18回日本心血管内分泌代謝学会学術総会が開催されてから11年振りとなります。開催形式は、原点に立ち返った2024年度の学術総会(小川佳宏会長)の流れを継承し、CVEM単独で現地の対面開催としました。当日は223名の大変多くの方々にご参加・ご議論いただきまして、盛況のうちに本総会を終えることができました。横浜の現地に御参加いただいた皆様、また本総会の開催に御支援をいただいた各方面の皆様に心より御礼を申し上げます。

今回、CVEM2025のテーマは、2028年に創立100周年を迎える横浜市立大学の掲げる「伝統と革新の、その先へ」とも連動した「心腎代謝連関の研究と臨床：伝統と革新の、その先へ」とさせていただき、CVEMとそれを取り巻く幅広い最先端の基礎・トランスレーショナル・臨床研究を取り上げました。

特別講演では、柳沢正史教授(筑波大学国際統合睡眠医科学研究機構)に「睡眠の謎に挑む：原理の追求から社会実装まで」と題した、これまでの柳沢先生の「オレキシンと睡眠」のご研究に関する大変興味深いご講演をいただきました。日曜日の朝のセッションにも関わらず、会場には多くの参加者が集まり、若手の先生方も含めて活発な質疑応答が行われました。特別講演以外にも、3つのシンポジウム、4つのラン



写真1：特別講演いただいた柳沢正史先生(筑波大学国際統合睡眠医科学研究機構 機構長)、小豆島事務局長と

チョンセミナー、1つの共催セミナー、高峰譲吉賞・高峰譲吉研究奨励賞・永井良三賞の受賞講演、YIA 審査講演、一般演題（口演）、ポスター発表が行われ、各々のセッションでは熱心な討議が繰り広げられ、大変盛況でした。CVEM2025 では久しぶりの2日間現地開催の形式を取りましたため、参加者の方々には各々のセッションを存分にお楽しみいただけたものと思います。ポスター発表では、演題をご登録いただいた方々にしっかりと発表いただく時間を確保し、各発表カテゴリーの中から優秀ポスター発表賞を一演題選出し、閉会式で表彰するという新しい取り組みも行わせていただき、次世代を担う若手の方々にエンカレッジすることができたのではないかと存じます。

高齢化の進展と相まって近年著しい増加傾向にある高血圧、糖尿病・脂質異常症・高尿酸血症などの代謝疾患、脳心血管病、腎臓病は互いに影響し合って共通の病態基盤を形成しており、一体的に“心腎代謝連関病”として捉え、各病態に対する個別的对応とともに包括的对応による病態連関制御が重要であると考えられます。この増大しつつある“心腎代謝連関病”は、“フレイル・転倒・認知症”とも関連しています。今回のCVEM2025は、これらを克服して健康長寿のさらなる向上を図るため、様々な臓器による心血管内分泌代謝の恒常性維持機構と破綻病態を見渡してともに検討し、CVEMの将来像も含めて議論する領域横断的な総会にできたものと思います。

2026年には沖縄にて第30回日本心血管内分泌代謝学会学術総会（会長：益崎裕章先生，琉球大学）が開催されます。また来年の学術総会にて、皆様にお目にかかることができることを心より楽しみにしております。



写真2：CVEM2025 総会を無事に終えて

第29回日本心血管内分泌代謝学会研究賞 受賞者プロフィール

第29回日本心血管内分泌代謝学会研究賞を受賞されました先生方のプロフィールを掲載いたします。

----- 第29回高峰譲吉賞受賞者 -----

南野 徹 先生（順天堂大学大学院医学研究科循環器内科）

受賞演題

「老化細胞を標的とした心血管代謝性疾患に対する治療法の開発」



略歴

1989年	千葉大学医学部卒業
1997年	医学博士号取得（東京大学）
1997年	ハーバード大学医学部リサーチフェロー
2000年	帝京大学医学部第3内科助手
2001年	千葉大学大学院医学研究院循環病態医科学助教
2007年	科学技術振興機構さきがけ研究者（兼任）
2010年	千葉大学大学院医学研究院循環病態医科学講師
2012年	文部科学省学術調査官（兼任）
2012年	新潟大学大学院医歯学総合研究科循環器内科教授
2018年	日本学術振興会学術システム研究センター研究員（兼任）
2020年	順天堂大学大学院医学研究科循環器内科教

—— 受賞によせて ——

このたびは、日本心血管内分泌代謝学会より栄誉ある高峰譲吉賞を賜り、身に余る光栄に存じます。思えば、若い頃に本学会より若手研究奨励賞、さらに高峰譲吉研究奨励賞を頂戴し、その後もこの学会の温かいご支援のもとで研究を継続してまいりました。改めて、本学会が私の研究者としての歩みを育んでくださったことに、心より感謝申し上げます。

私はこれまで、「細胞レベルの老化が個体老化や加齢関連疾患の発症に深く関与する」という細胞老化仮説のもとに、心血管・代謝疾患における老化細胞の意義を追究してまいりました。初期の研究では、血管におけるテロメア・テロメラーゼ制御機構を明らかにし、ヒト動脈硬化巣に老化細胞が集積することを初めて示しました。さらに、老化血管細胞が一酸化窒素産生の低下や炎症惹起を介して血管機能障害を引き起こすこと、そしてp53/p21シグナル抑制によりこれらの病的形質が改善することを報告しました。

続いて、脂肪組織における老化細胞の蓄積が慢性炎症やインスリン抵抗性を誘発することを発見し、脂肪組織特異的p53欠失が糖代謝異常を改善することを示しました。これらの成果により、老化細胞が代謝疾患の新たな病態ドライバーであることを提唱するに至りました。また、心

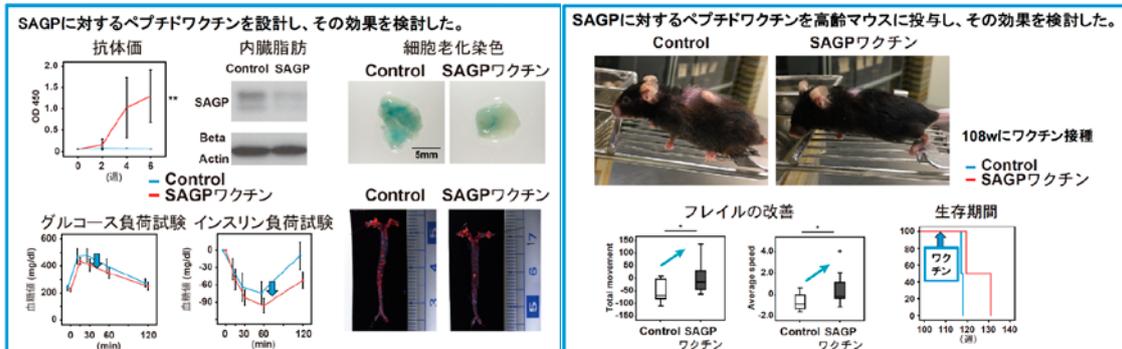
不全モデルにおいても、心筋・血管・免疫細胞における p53 シグナル活性化が病態を悪化させることを示し、組織特異的な老化制御による治療の可能性を明らかにしました。

こうした基礎的研究の延長として、老化細胞を標的とした治療法の開発にも取り組んでおります。老化細胞抗原 SAGP を同定し、これを標的とした老化細胞除去ワクチンを開発した結果、肥満や動脈硬化、加齢性フレイルを改善することに成功しました (図)。さらに、カロリー制限模倣薬として知られる SGLT2 阻害薬が AMPK 活性化を介して PD-L1 発現を抑制し、老化細胞に対する免疫応答を高めることを見出しました。これらの成果は、心血管・代謝疾患に対する新たな治療戦略としての老化細胞標的療法の実現に向けた第一歩と考えております。

本学会は、私にとって研究の礎を築いた学びの場であり、若い頃に抱いた「老化を科学的に制御する」という夢を支えてくださった存在です。今後も、心血管・代謝研究の発展と、老化克服による健康寿命の延伸に向け、基礎と臨床をつなぐ橋渡し研究を推進してまいります。最後に、これまでご指導・ご支援を賜りました諸先生方、そして共に歩んできた研究仲間へ心から感謝申し上げます。

老化細胞除去ワクチンの開発

- ・老化細胞除去ワクチンにより、肥満に伴う代謝異常や動脈硬化が改善した
- ・老化細胞除去ワクチンにより、高齢マウスのフレイルの改善や寿命延長が見られた



Nat Aging. 2021; 1: 1117-1126.

小豆島 健護 (横浜市立大学医学部 循環器・腎臓・高血圧内科学)

受賞研究テーマ

「心・腎・内分泌・代謝疾患の新規治療戦略としての組織レニン-アンジオテンシン系」



略歴

平成 18 年 3 月	横浜市立大学医学部医学科	卒業
平成 27 年 3 月	横浜市立大学大学院医学研究科	博士課程 修了
平成 27 年 4 月	横浜市立大学附属病院	腎臓・高血圧内科 指導診療医
平成 29 年 1 月	Duke-NUS Medical School, CVMD Program,	Senior Research Fellow
平成 31 年 4 月	Duke-NUS Medical School, 日本学術振興会	海外特別研究員
令和 2 年 4 月	横浜市立大学医学部	循環器・腎臓・高血圧内科学 助教
令和 7 年 4 月	横浜市立大学医学部	循環器・腎臓・高血圧内科学 講師

—— 受賞によせて ——

この度は、第 29 回高峰讓吉研究奨励賞を賜り、誠に有難うございます。本賞は、私が尊敬する諸先生方が受賞されてきた大変栄誉ある賞であり、身に余る光栄と存じます。また、私が所属する教室の田村功一主任教授も受賞されており（第 12 回高峰讓吉研究奨励賞）、今回の受賞を心より嬉しく思います。

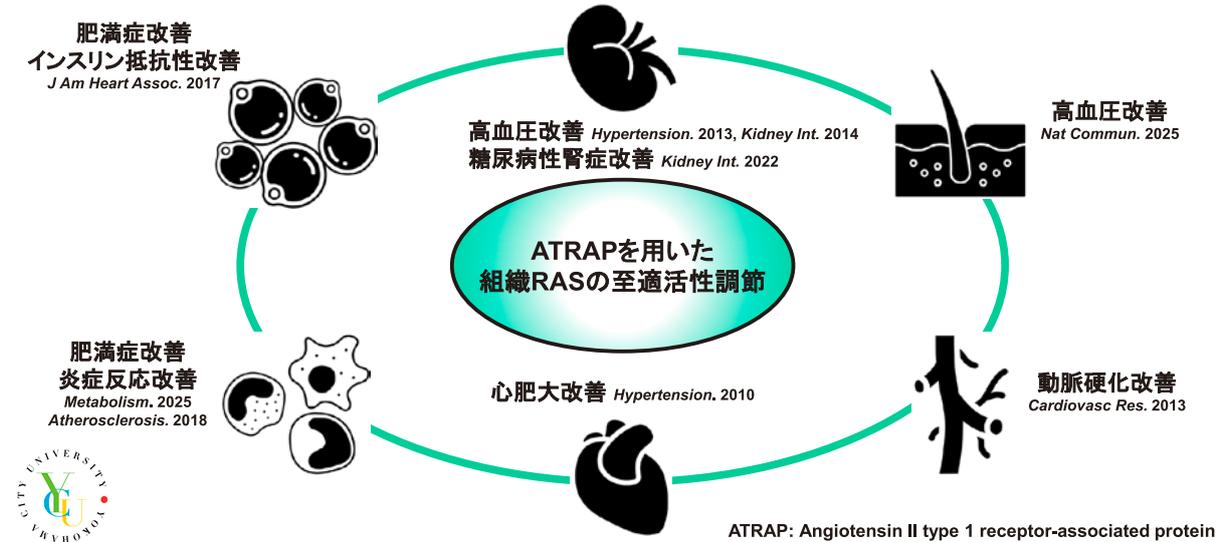
私は、大学院（横浜市立大学医学部 循環器・腎臓・高血圧内科学教室）に進学してから、田村功一主任教授のご指導のもと、一貫して組織レニン-アンジオテンシン系（RAS）の病態生理学的意義の解明研究に取り組んでまいりました。我々の研究室では、以前より AT1 受容体関連蛋白（ATRAP）に関する研究を行っており、ATRAP は AT1 受容体の細胞内取り込みを促進することで同受容体のシグナル経路を抑制する組織 RAS 活性抑制因子であることを報告してきました（Azushima K, et al. *Curr Hypertens Rep* 2020）。大学院生時代には、脂肪組織特異的 ATRAP 高発現による脂肪組織 RAS 活性抑制が、肥満症と随伴するインスリン抵抗性を改善させることを明らかにしました（Azushima K, et al. *J Am Heart Assoc* 2017）。大学院修了後は、RAS 研究の世界的権威である Thomas Coffman 教授（Duke-NUS Medical School）の研究室に留学させていただき、糖尿病性腎症における RAS の病態生理学的意義の解明研究に取り組み、RAS 活性化を背景とした腎エネルギー代謝障害が病態進展の一因であることを明らかにしました（Azushima K, et al. *Kidney Int* 2023）。帰国後は、留学中に得た成果を基にさらに研究を展開させるとともに、これまでの組織 RAS に関する知見を皮膚組織にも拡大し、高血圧関連生活習慣病および加齢性臓器障害の新規病態基盤の解明研究に着手しており、超高齢社会における生

活習慣病克服のため、皮膚組織機能改善を標的とした革新的治療法の開発を目指しています。その研究成果の一部として、皮膚組織 RAS の活性亢進が末梢血管の過剰収縮を介して高血圧の進展に寄与することを報告しました (Taguchi S, Azushima K, et al. *Nat Commun* 2025)。

これまでに RAS 研究は世界中でやり尽くされてきた感もあり、既に様々な RAS 阻害薬が開発され実臨床で多くの患者様の病態改善に貢献している状況ではあります。しかしながら、生物が進化の過程で獲得した RAS は、やはり生体にとって必要不可欠な内分泌系であり、これまでの研究で見落とされた未知の部分がまだまだ存在し、その追究が重要な発見につながると信じております。この度の受賞を励みにし、引き続き研究活動に精進してまいりたいと存じます。

末筆になりましたが、横浜市立大学医学部 循環器・腎臓・高血圧内科学教室の田村功一主任教授および涌井広道准教授には、大学院生時代より多くのご指導をいただいております。この場を借りまして、深く感謝申し上げます。

心・腎・内分泌・代謝疾患の新規治療戦略としての 組織レニン-アンジオテンシン系(組織RAS)



候 聡志 先生（東京大学先端循環器医科学講座 特任助教）

受賞研究テーマ：

「シングルセル・マルチオミクス解析を活用した心不全の病態解明」



略歴

平成 22 年（2010 年）	東京大学医学部医学科卒業
平成 24 年（2012 年）	聖路加国際病院内科系初期研修修了
平成 26 年（2014 年）	榊原記念病院循環器内科専門研修修了
平成 30 年（2018 年）	東京大学大学院医学系研究科医学博士課程修了
令和 3 年（2021 年）	東京大学大学院医学系研究科重症心不全治療開発講座特任助教
令和 6 年（2024 年）	東京大学大学院医学系研究科先端循環器医科学講座 特任助教

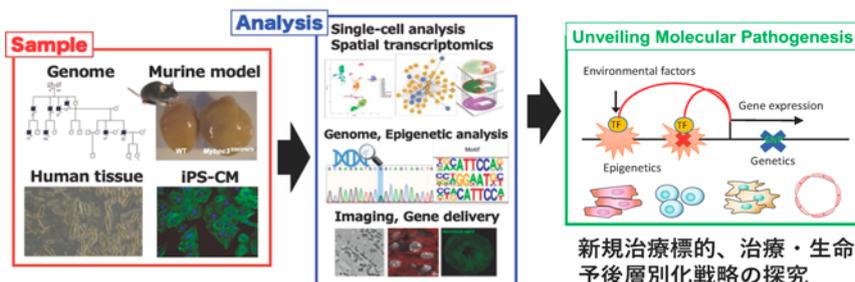
—— 受賞によせて ——

この度、日本心血管内分泌代謝学会における「永井良三賞」を賜り、身に余る光栄に存じます。この場をお借りして、これまでずっとご指導いただいた小室一成先生をはじめ、支えて下さった多くの先生方・共同研究者・学生・スタッフの皆様へ深く感謝申し上げます。

私の研究テーマは、心不全という極めて多様かつ複雑な臨床病態を「細胞・分子レベルから解きほぐし、臨床医療へと橋渡しする」ことにあります。近年、シングルセル解析やマルチオミクス、空間遺伝子発現解析といった技術革新により、個々の細胞の状態・遷移・相互作用を精緻に捉えることが可能になりました。私自身、これら最先端技術を主軸に据え、心筋細胞・線維芽細胞・免疫細胞などの多様な心臓内細胞集団が、どのようにして心不全という臨床像へと至るのか、その“分子病態網”の解明に挑んできました。

例えば、圧負荷心不全マウスモデルや心筋梗塞マウスモデルに対してシングルセル解析や空間遺伝子発現解析を行うことで、細胞種間の相互作用や心不全進展過程における変化を解明し、治療標的の探索を行ってきました。また、MD 研究者としての強みを活かして、重症家族性拡張型心筋症患者のゲノム解析により同定された *LMNA* Q353R 変異について、遺伝子改変モデルマウスおよび疾患特異的 iPS 心筋細胞を樹立し、シングルセル RNA-seq/ATAC-seq 解析を実施することで、転写因子 TEAD1 が変異ラミン A/C に“トラップ”されて成熟心筋細胞形成が阻害される機構を明らかにしました。さらに、ヒト心不全患者心筋 DNA 損傷という指標を心不全患者の治療応答

シングルセル・マルチオミクス解析を活用した心不全病態解明



性・予後予測へとつなげた研究も進めてきました。

これらの研究はいずれも、「細胞レベルの高次元データ」を「患者一人一人の臨床実像」に結びつけるトランスレーショナルな志向を持っています。高齢化の進行する我が国において、心不全はまさに国民的課題である一方で、未だ十分な個別化医療は実現されていません。私自身、日々臨床の現場で心不全患者さんと向き合う中で、標準治療の枠を超えた“次世代の医療”が求められていると痛感してきました。故に、マルチオミクス・シングルセル・空間解析といった各種技術を統合し、心不全の発症・進展の分子メカニズムを掘り下げ、臨床応用を視野に入れた“精密循環器医療”を実践して参りたいと思います。

本賞を励みに、今後はさらに研究を深化させ、細胞間のダイナミクス・時空間的遺伝子発現・患者由来モデルの構築などを通じて、心不全の治療標的や層別化指標の開発へと結実させていきたいと思っています。最後になりましたが、改めて本賞をご選定下さった学会関係各位、ご指導ご支援を賜った多くの先生方、そして日々研究に励む後輩に深甚なる感謝を申し上げます。本受賞を契機として、今後も志を新たに、心不全克服に向けた歩みを継続して参ります。

伊藤 亘（慶応義塾大学医学部腎臓内分泌代謝内科）

受賞演題

「血管内皮 DNA 損傷 -ET-1-ACSS2 経路が駆動する
Cardio-Kidney-Metabolic 症候群と ETAR 阻害による治療的介入」

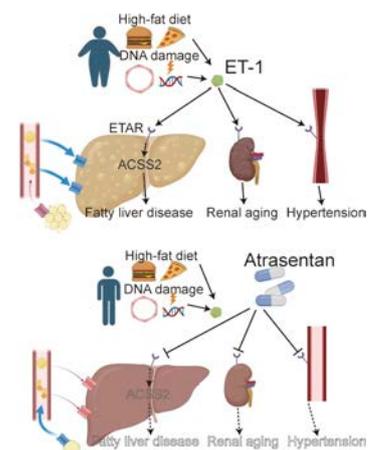


略歴

2018年3月	慶応義塾大学医学部 卒業
2018年4月	国立病院機構東京医療センター 入職
2020年4月	神奈川県警友会けいゆう病院 入職
2021年4月	静岡赤十字病院 入職
2022年4月	慶応義塾大学病院 入職

— 研究内容および抱負 —

老化の根源的メカニズムである DNA 損傷に着目し、特に DNA 修復能が低く損傷を受けやすい血管内皮細胞が、心臓・腎臓・代謝系が複雑に連関し機能不全に陥る心腎代謝（CKM）連関破綻の起点となりうるという仮説を検証した。まず、血管内皮特異的に DNA 損傷を誘導したマウスに高脂肪食という代謝ストレスを負荷したところ、対照群に比して速やかに高血圧を発症し、さらに低 HDL コレステロール血症を特徴とする脂質異常症、脂肪肝、内臓脂肪蓄積といったメタボリックシンドローム様の病態を呈した。同時に、これらのマウスでは腎臓の老化が著しく加速していることも見出した。この全身性変化の分子メカニズムとして、DNA 損傷を受けた内皮細胞が強力な血管収縮因子であるエンドセリン-1（ET-1）の分泌を亢進させることを突き止めた。過剰な ET-1 は、組織の低酸素状態を惹起するとともに、その受容体である ETAR に直接作用することで、肝臓における脂質代謝の鍵酵素 ACSS2 を活性化させた。これが肝臓での脂質合成を促進し、末梢でのコレステロール排出障害と相まって全身の脂質代謝異常と腎老化を駆動する、免疫系を介した従来応答とは異なる内分泌シグナル異常という新たな病態経路を同定した。この ET-1/ETAR シグナルが病態の根幹であることは、選択的 ETAR 阻害薬の投与によって全ての病態が包括的に改善されることから強く裏付けられた。最終的に、ヒト腎生検組織の解析においても、血管内皮の DNA 損傷度は血中 HDL コレステロール値、脂肪肝の指標、腎機能低下、そして腎臓の ETAR 発現レベルと強く関連していることが確認された。本研究で見出した「血管内皮 DNA 損傷-ET-1/ETAR シグナル」という経路は、CKM 症候群の新たな病態基盤を提示し、有望な治療標的となる可能性を強く示唆する。本成果は病態理解と治療層別化に貢献しうるものであり、今後は本病態を反映するバイオマーカー開発や先制医療の実現に向け、CKM 症候群の克服という臨床課題の解決に繋がる研究に一層邁進する所存である。



岡村 駿 (東京大学医学部附属病院 循環器内科)

受賞演題

「TGF- β ワクチンを用いたマルファン症候群の大動脈瘤に対する革新的治療法開発」



略歴

2016年3月 東邦大学医学部医学科 卒業
2016年4月 東京大学医学部附属病院 初期研修医
2017年4月 武蔵野赤十字病院 初期研修医
2018年4月 関東中央病院 循環器内科 専攻医
2021年4月 東京大学大学院医学系研究科 博士課程入学
2025年4月 東京大学大学院医学系研究科 博士課程修了

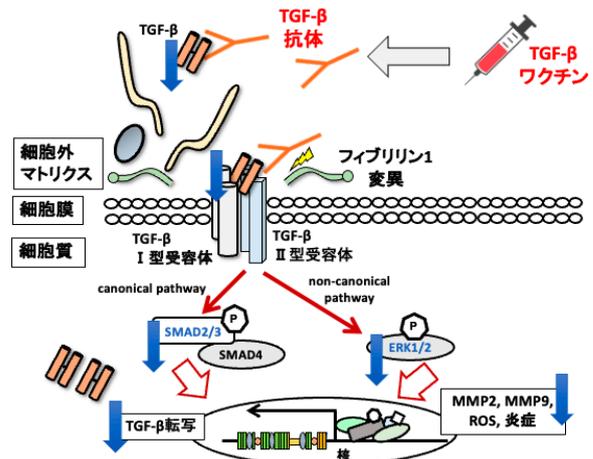
— 研究内容および抱負 —

この度は、第29回日本心血管内分泌代謝学会若手研究奨励賞という名誉ある賞にご選出いただき、誠にありがとうございます。選考委員の先生方、関係者の方々に御礼申し上げます。

マルファン症候群 (MFS) は、原因遺伝子が第15染色体上に位置する *FBNI* の病的変異によって発症する常染色体顕性遺伝の全身性結合組織疾患です。本疾患は全身の組織に影響を及ぼしますが、生命予後に最も寄与するのは大動脈解離や瘤の破裂です。細胞外基質であるフィブリリン1の異常に伴う TGF- β の活性化が MFS の大動脈瘤進展の主要な機序とされてきましたが、TGF- β シグナルを標的とした創薬は実現されておらず、また現時点では ARB や β 遮断薬といった内服では完全な大動脈瘤の進展抑制を達成することができていないため、私達は基礎研究を通して創薬研究を進めてまいりました。

今回の研究で私達は、TGF- β ワクチンを C57BL/6J マウスに投与し抗体価の上昇を確認しました。続いて TGF- β ワクチンをマルファンモデルマウスに投与し、大動脈の拡大を有意に抑制させることを示しました。このワクチンは他臓器への炎症を惹起しないことも確認しました。MFS は若年患者がほとんどであり、日々の ARB や β 遮断薬といった降圧薬の内服が欠かせない一方、降圧作用からアドヒアランスが安定せず、実臨床においては内服中断、受診の自己中断などの症例も見受けられます。例えば年に1回から数回のワクチン接種で疾患の進行予防効果が発揮され、患者の内服アドヒアランスの解決、経済面での負担や医療医の削減も見込まれ、厚生労働行政上の意義は常に大きいと考えております。今後は、同ワクチンが臨床応用できるよう橋渡し研究を進めていく予定です。

最後に、ご指導いただいております東京大学医学部附属病院 循環器内科 八木 宏樹先生、赤澤 宏先生、大阪大学大学院医学系研究科 林 宏樹先生、中神 啓徳先生にこの場を借りて心より御礼申し上げます。



蕭 捷倫 先生（順天堂大学 循環器内科学講座）

受賞演題

「老化細胞感作を用いた新規老化細胞除去治療法の開発」



略歴

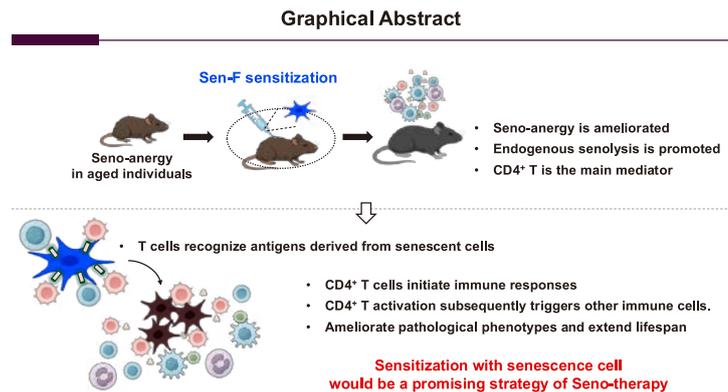
2015年6月	China Medical University (台湾)	学士 (生命科学) 取得
2016年6月	China Medical University (台湾)	修士 (臨床医学) 取得
2020年6月	China Medical University (台湾)	博士 (生物医学) 取得
2020年11月-2021年3月	新潟大学大学院 医歯学総合研究科 循環器内科	特任助手
2021年4月-現在	順天堂大学大学院 医学研究科 循環器内科	ポスドクトラルフェロー

— 研究内容および抱負 —

加齢に伴う肥満、糖尿病、動脈硬化などの疾患は、老化細胞の蓄積により慢性炎症や組織障害を引き起こすことが知られています。近年、これらの老化細胞を除去する「セノリシス (senolysis)」が、加齢関連疾患の改善や寿命延伸に寄与する可能性が注目されています。私は、外来性薬剤に依存せず、老化細胞そのものを抗原として免疫系を感作し、内因性セノリシスを誘導する新たな手法の開発とその機序解明に取り組んでいます。

本研究では、放射線照射により老化を誘導したマウス耳由来線維芽細胞をアジュバントと混合し、マウスへ腹腔内または皮下に3~4週間隔で最大3回免疫する感作法を確立しました。さらに、この感作法を老化細胞移植モデル、高脂肪食誘導肥満モデル、ApoE欠損動脈硬化モデルに適用し、免疫的セノリシスの効果を検討しました。その結果、加齢マウスで低下していた内因性セノリシス活性が、老化細胞による免疫感作により顕著に回復し、若齢マウスを上回るレベルに達することを見出しました。この反応は主にCD4⁺T細胞、とくに細胞傷害性CD4⁺T細胞により媒介されていました。さらに、高脂肪食モデルでは感作によりグルコース代謝の改善と脂肪組織中の老化細胞負荷の減少を確認し、大動脈では老化および炎症マーカーの発現低下が認められました。ApoE欠損モデルでは、特に腹部大動脈でプラーク形成抑制傾向が示されました。

これらの成果は、老化細胞感作による免疫的セノリシス誘導が加齢関連疾患の新たな治療戦略となる可能性を示唆しています。今後は、この免疫学的メカニズムを分子レベルでさらに明らかにし、標的抗原の最適化や投与条件の改良を通じて臨床応用を目指します。最終的には、老化細胞を標的とするワクチン療法の確立により、加齢関連疾患の克服と健康寿命の延伸に貢献したいと考えています。



戴 哲皓 先生 (東京大学大学院医学系研究科 先端循環器医科学講座)

受賞演題

[Myocardial DNA Damage Predicts Heart Failure Outcomes in Various Underlying Diseases]



略歴

2015	東北大学医学部医学科 卒業
2015-2019	聖路加国際病院 初期研修医、内科後期研修医、内科チーフレジデント
2017-2019	聖路加国際大学大学院公衆衛生学研究科 修士課程
2020-2021	榊原記念病院循環器内科 専門修練医
2021-2024	東京大学大学院医学系研究科循環器内科 博士課程 (小室一成教授)
2023-2025	日本学術振興会 特別研究員
2025-	東京大学大学院医学系研究科 先端循環器医科学講座 特任研究員

— 研究内容および抱負 —

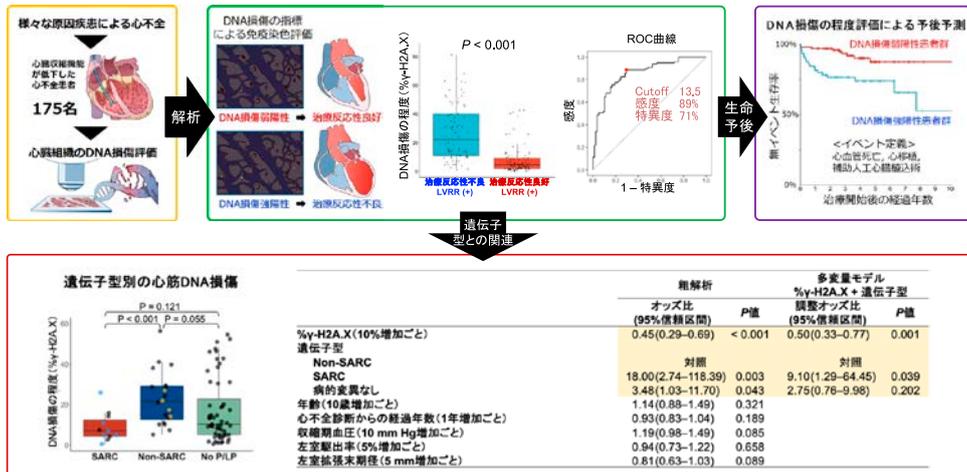
この度は若手研究奨励賞を授与いただき、大変光栄に思い、学会関係者の皆様・選考委員の先生方に深く御礼申し上げます。受賞した研究内容は、大学院生時代から取り組んでまいりました、心筋 DNA 損傷による心不全の治療効果・予後の予測に関する複数の課題をまとめたものであり、この場をお借りしてご指導いただきました小室一成教授、野村征太郎先生、並びに研究参加者・協力者・支援者の皆様に感謝したいと思います。

本研究では、まず原疾患を問わず左室収縮能の低下した心不全 (HFrEF) 患者の心筋生検検体で γ -H2A.X に対する免疫染色を用いて DNA 損傷を評価し、心筋 DNA 損傷の程度が強ければ左室リバースリモデリング (LVRR) を達成しにくく、心臓死・心移植・補助人工心臓植込みのリスクが高いことを示しました。加えて、疾患横断的に見ると、疾患ごとの治療反応性と平均的な DNA 損傷は逆線形関係を呈しました。即ち、心筋 DNA 損傷は原疾患によらず HFrEF に普遍的に起きる現象で、予後予測に有用であることが示唆されました。

続いて、拡張型心筋症に限定し、全エクソームシーケンスを実施しました。非サルコメア関連遺伝子変異 (LMNA など) 患者は、サルコメア関連遺伝子変異 (TTN など) 患者より治療反応不良であり、かつ、心筋 DNA 損傷の程度が高度でした。遺伝子型と治療反応性の既知の相関に、心筋 DNA 損傷が寄与することが初めて示唆されました。

最後に、より非侵襲的な心筋 DNA 損傷評価法を検討し、血清細胞外小胞の small RNA シーケンスと qPCR を用いて、心筋 DNA 損傷と正の相関を示す microRNA を一つ同定し、同 microRNA が治療反応性を予測できることを示しました。現在、外的妥当性を検証するとともに、機能解析も進めているところです。

受賞できたことを糧にし、今後は DNA 損傷という生命現象の追及を目的とする基礎研究、そして予後予測マーカーの臨床応用や microRNA に基づいた治療法開発などを目的とする臨床研究の二方向に広げて研究を進めて参りたいと思います。ご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願いいたします。



永芳 友 先生（熊本大学大学院生命科学研究部加齢医学寄附講座 特任講師）

受賞演題

「修飾ヌクレオシドが織りなす生体制御と腎不全に伴う変化から紐解く
新規心腎連関機序」



略歴

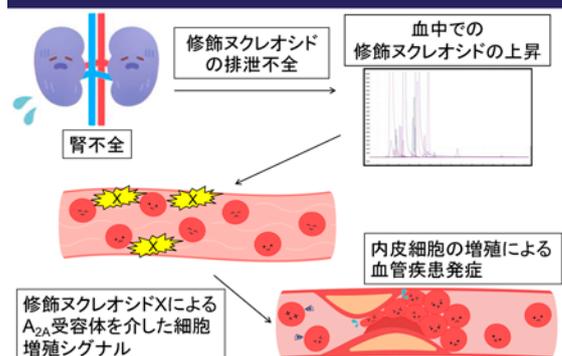
平成 29 年 3 月 熊本大学医学部医学科卒業
令和 3 年 3 月 熊本大学大学院医学教育部修了
平成 29 年 4 月 天草地域医療センター 基幹型研修医
平成 31 年 4 月 熊本大学病院腎臓内科 医員
令和 3 年 6 月 熊本大学臨床医学教育研究センター 特任助教
令和 4 年 4 月 熊本大学大学院生命科学研究部総合分子医学講座 助教
令和 5 年 4 月 熊本大学大学院生命科学研究部加齢医学寄附講座 特任助教
令和 7 年 4 月 熊本大学大学院生命科学研究部加齢医学寄附講座 特任講師

— 研究内容および抱負 —

本研究は、転写後化学修飾を受けた RNA の分解産物である修飾ヌクレオシドの新規生理活性と尿中への排泄現象に着目し、腎不全に伴う心血管疾患発症機序の解明を目的として実施した。まず慢性腎不全患者 230 名の血液中の修飾ヌクレオシドを、高速液体クロマトグラフ質量分析計 (LC-MS/MS) を用いて網羅的に解析し、腎機能低下によって血中へ蓄積する修飾ヌクレオシドを探索した。その中でも eGFR と最も強く相関する修飾ヌクレオシド X を同定した。次に修飾ヌクレオシド X の血管内皮細胞における病態生理学的意義を評価するため、ヒト大動脈由来血管内皮を用いた検討を実施した。その結果、修飾ヌクレオシド X はアデノシン A_{2A} 受容体を介し Erk シグナルを活性化し、細胞増殖および炎症反応を惹起することを明らかにした。特に、修飾ヌクレオシド X はアデノシンと構造が類似しているため、より詳細な結合状態を評価することを目的として表面プラズモン共鳴技術による非標識分子間相互作用解析装置を用いて、修飾ヌクレオシド X がアデノシンよりも高い親和性を持ってアデノシン A_{2A} 受容体に結合することを明らかにした。さらに腎不全モデルマウスにおいて修飾ヌクレオシド X が血管内膜肥厚病変を増悪させることを示し、新規心腎連関機序を提唱した。本研究は修飾ヌクレオシドを病態分子として位置づける新たな概念を示す。今後はより詳細な分子メカニズムを明らかにすることで本分野を深化させ、診断・治療応用へ展開することを目指している。

本研究を実施するにあたり、ご指導・ご助言をいただきました熊本大学大学院生命科学研究部腎臓内科学講座横井秀基教授、向山政志前教授にこの場を借りて心より御礼申し上げます。また本研究を YIA にご選定いただきました審査員の先生方にも御礼申し上げます。本受賞を励みとし、今後とも研究活動に邁進いたします。

修飾ヌクレオシドXによる血管疾患発症メカニズム



小室 仁 先生（東京大学医学部附属病院 先端循環器医科学講座）

受賞演題

「非心筋細胞の心不全病態及び多臓器連関における役割の全貌解明とそれに基づく新規治療法開発」



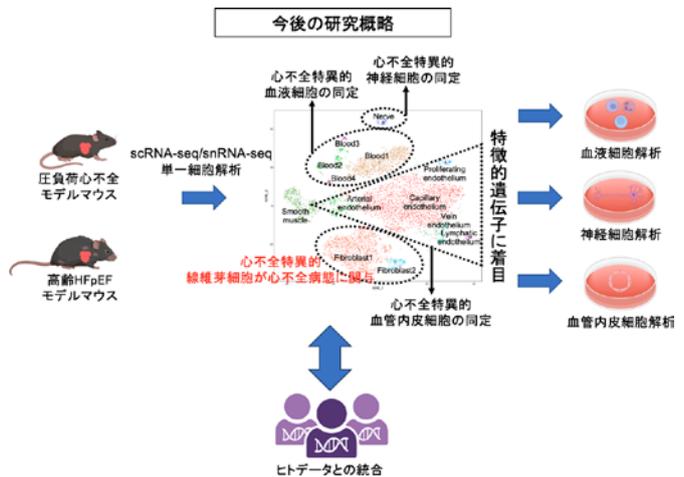
略歴

- 2013年3月 慶應義塾大学医学部 卒業
- 2013年4月 東京警察病院 初期臨床研修
- 2015年4月 榊原記念病院 循環器内科専修医
- 2017年4月 慶應義塾大学医学部循環器内科 助教
- 2021年4月 日本学術振興会特別研究員 DC2
- 2023年3月 慶應義塾大学大学院博士課程 修了
- 2023年4月 日本学術振興会特別研究員 PD

— 研究計画および抱負 —

心不全（HF）は世界的に増加し主要な死因の一つである。従来の研究は主として心筋細胞（CM）に焦点が当てられてきたが、心臓の大部分を占める非心筋細胞（心臓線維芽細胞、内皮細胞、免疫細胞など）の病態的意義は十分に解明されていない。申請者はこれまでに、単一細胞 RNA 解析を用いて心臓線維芽細胞（CF）の不均一性を明らかにし、心不全期に特異的に出現する集団（HF-Fibro）を同定した。この集団は転写因子 Myc を高発現し、CF 特異的 Myc 改変マウスを用いた解析により、Myc が心不全進展に直接関与することを示した。さらに、マルチオミクス解析から Myc がケモカイン Cxcl1 の転写を直接制御し、CF から分泌された Cxcl1 が CM 上の受容体 Cxcr2 を介して収縮機能を抑制する新規経路を同定した（Nature Cardiovascular Research 2025）。本研究により、CF は線維化の担い手にとどまらず、Myc-Cxcl1-Cxcr2 経路を介して心不全を惹起する細胞であることを明らかにした。今後はこの経路の上流因子および他の液性因子を同定し、心不全特異的 CF の分化誘導機構の全貌を明らかにする。

さらに申請者は、増加の著しい HFpEF（駆出率保持性心不全）においても、非心筋細胞が病態形成に果たす役割に注目している。HFpEF は現在全心不全症例の 50% 以上を占め、特に日本では肥満頻度が低く高齢女性に多いという独自の特徴を示すが、その病態や治療法は未解明である。申請者は、欧米型肥満 + 炎症モデルマウスおよび日本型超高齢 HFpEF モデルを用いて心臓の単一細胞解析を行い、線維芽細胞、内皮細胞、免疫細胞などの非心筋細胞ネットワークの変化を包括的に解析する。さらに、HFpEF 患者心筋の単一核 RNA-seq（snRNA-seq）データと統合解析を行い、疾患特異的細胞群と分子経路を同定することで、ヒト病態への橋渡しを行う。これらの研究を通じて、心不全発症における非心筋細胞の役割の全貌を明らかにし、新たな分子標的治療の開発につなげたい。将来的には、得られた知見をもとに心不全の個別化治療・予防法を確立し、基礎から臨床への橋渡し研究を推進することを目指す。



田口 慎也 先生 (横浜市立大学医学部 循環器・腎臓・高血圧内科学)

受賞演題

「皮膚組織レニン・アンジオテンシン系に着目した高血圧の新規病態解明」



略歴

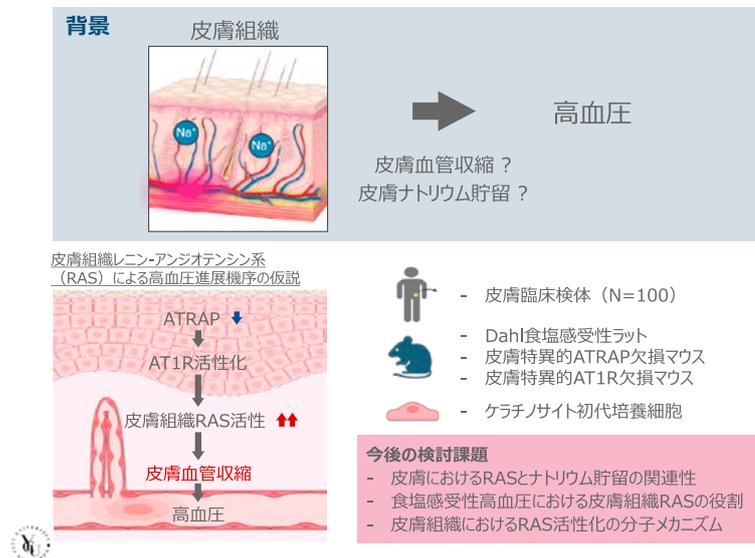
2014年 横浜市立大学医学部医学科卒業
2014年 東京通信病院 初期研修医
2016年 岡崎市民病院 専攻医
2018年 湘南鎌倉総合病院 専攻医
2020年 横浜市立大学医学部 循環器・腎臓・高血圧内科学 博士課程
2024年 横浜市立大学医学部 循環器・腎臓・高血圧内科学 助教

— 研究計画および抱負 —

この度は、第29回日本心血管内分泌代謝学会学術総会におきまして、若手研究助成という大変栄誉ある賞を賜りまして大変光栄に存じます。本大会長の田村功一先生、選考委員の先生方、ならびに関係の諸先生方々に深謝申し上げます。また、日頃からご指導くださる涌井広道先生、小豆島健護先生をはじめ、研究をサポートしてくださる多くの先生方、スタッフの皆様にご心より感謝申し上げます。

近年、皮膚と高血圧の関連が注目されており、皮膚血管の収縮や皮膚組織へのナトリウム蓄積が血圧上昇に寄与する可能性が報告されていますが、その詳細な機序は十分に解明されていません。私たちの教室ではこれまでに、アンジオテンシンII受容体シグナルを内因性に阻害する作用を有するATRAPを皮膚ケラチノサイト特異的に欠損するマウスを作製し、局所のレニン-アンジオテンシン系(RAS)の亢進がAng II誘導性高血圧を増悪させることを明らかにしました。一方で、皮膚組織RASの過剰活性化がどのように血管収縮やナトリウム蓄積に結びつくのか、その分子基盤は依然として未解明です。今後は、複数の高血圧モデル動物や皮膚ケラチノサイト特異的なATRAP欠損マウスおよびAT1R欠損マウス、さらには皮膚臨床検体を組み合わせることで、皮膚組織RASが高血圧の発症・進展に果たす役割を体系的に検証していきたいと考えています。

将来的には、皮膚組織RAS活性を指標とした個別化医療の実現や、皮膚特異的薬物送達システムを応用した副作用の少ない高血圧治療薬の開発に貢献したいと考えております。これにより、高血圧に起因する脳心血管疾患の予防、さらには健康長寿社会の実現につなげることを目標としております。今回の受賞を励みに、今後も研究をさらに推進し、臨床的意義の高い成果を生み出していきたいと存じます。今後とも何卒御指導・御鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



日本心血管内分泌代謝学会役員名簿

■理事長

小川 佳宏 九州大学大学院医学研究院病態制御内科学

■副理事長

桑原 宏一郎 信州大学医学部循環器内科学教室

■理事

市原 淳弘 東京女子医科大学内分泌疾患総合医療センター高血圧・内分泌内科
岸 拓弥 国際医療福祉大学福岡保健医療学部
下澤 達雄 国際医療福祉大学成田病院臨床検査科
新藤 隆行 信州大学医学部医学科循環病態学教室
菅波 孝祥 名古屋大学環境医学研究所分子代謝医学分野
曾根 正勝 聖マリアンナ医科大学代謝・内分泌内科
田村 功一 横浜市立大学医学部循環器・腎臓・高血圧内科学
徳 留 健 横浜市立大学医学部薬理学
長瀬 美樹 杏林大学医学部肉眼解剖学
西山 成 香川大学医学部薬理学
益崎 裕章 琉球大学大学院医学研究科内分泌代謝・血液・膠原病内科学講座(第二内科)
南野 徹 順天堂大学大学院医学研究科循環器内科
柳沢 正史 筑波大学国際統合睡眠医科学研究機構(WPI-IIIIS)

■監事

有馬 勇一郎 熊本大学国際先端医学研究機構
古橋 真人 札幌医科大学 循環器・腎臓・代謝内分泌内科学講座

■幹事

田中 智洋 名古屋市立大学 大学院医学研究科 消化器・代謝内科学
本間 健一郎 琉球大学 大学院医学研究科 内分泌代謝・血液・膠原病内科学講座(第二内科)
横井 秀基 熊本大学 大学院生命科学研究部 腎臓内科学

■名誉会員【38名】

荒川規矩男 伊藤 貞嘉 稲上 正 井村 裕夫 岩尾 洋 梅村 敏 江藤 胤尚
 荻原 俊男 片山 茂裕 寒川 賢治 北村 和雄 木之下正彦 小島 至 齊藤 壽一
 島本 和明 鈴木 洋通 高橋 伯夫 竹田 亮祐 田中 一成 富田 公夫 永井 良三
 中尾 一和 中川 雅夫 成瀬 光栄 名和田 新 林 晃一 平田結喜緒 藤田 敏郎
 眞崎 知生 松岡 博昭 南野 直人 宮森 勇 村上 和雄 矢崎 義雄 泰江 弘文
 吉永 馨 吉見 輝也 吉村 学

■功勞評議員【129名】

芦澤 直人 安部 陽一 荒井 宏司 飯利 太朗 池本 文彦 石川 三衛 石川 義弘
 石田 均 石橋みゆき 伊東 宏晃 伊藤 裕 伊藤 宏 井上 元 井上 達秀
 今城 俊浩 岩崎 泰正 岩本 安彦 上田 陽一 白井 健 内田 健三 浦 信行
 浦田 秀則 大磯ユタカ 大津留 晶 岡村 富夫 小川 久雄 小野 美明 柏原 直樹
 柏木 厚典 方波見卓行 加藤 丈司 川口 秀明 河野 雄平 河南 洋 菊池健次郎
 木越 俊和 木曾 良明 北見 裕 衣川 徹 木村 定雄 木村 時久 久代登志男
 熊谷 裕生 倉林 正彦 栗原 裕基 上月 正博 河野 雅和 児島 将康 後藤 淳郎
 此下 忠志 小林 直彦 小室 一成 斎藤 能彦 笹野 公伸 佐藤 敦久 佐藤 文俊
 塩之入 洋 重富 秀一 七里 眞義 菅原 照 瀬戸 信二 相馬 正義 高木耕一郎
 高須 信行 高野加寿恵 高橋 和広 高橋 貞夫 高柳 涼一 竹越 襄 武田 仁勇
 千原 和夫 辻井 悟 蔦本 尚慶 寺田 典生 東條 克能 徳留 悟朗 戸恒 和人
 中野 茂 中村 元行 成宮 周 西川 哲男 錦見 俊雄 西村 和修 西村 眞人
 野出 孝一 萩原 啓実 橋爪 潔志 橋本 隆男 長谷川浩二 林 登志雄 檜垣 實男
 東浦 勝浩 久留 一郎 平井 愛山 平田 恭信 廣江 道昭 廣岡 良隆 広瀬 茂久
 深水 昭吉 福井 清 福田 昇 藤原 久義 榊田 出 松浦 秀夫 松澤 佑次
 水野 兼志 光山 勝慶 宮内 卓 宮崎 滋 宮崎 瑞夫 向山 政志 宗 友厚
 村上 治 村木 篁 森 泰清 森井 成人 森瀬 敏夫 保嶋 実 山路 徹
 山下 博 山田 敬行 山本 啓二 山本 繁樹 山本 格 家森 幸男 吉林 宗夫
 吉村 道博 樂木 宏実 渡辺 毅

■評議員【127名】

赤澤 宏	浅原 哲子	小豆島健護	有馬 秀二	有馬勇一郎	安藤 孝	池田 惠一
池田 康将	石上 友章	石田 純治	泉 康雄	泉 裕一郎	泉家 康宏	市原 淳弘
一色 政志	海老原 健	大石 充	大谷健太郎	尾形真規子	小川 佳宏	小倉彩世子
尾上 健児	柿添 豊	笠原 正登	勝田 秀紀	勝谷 友宏	神出 計	神吉 昭子
唐島 成宙	川上 利香	岸 拓弥	岸本 一郎	木内謙一郎	木下 秀之	日下部 徹
桑原宏一郎	栗原 孝成	小松 弥郷	酒井 寿郎	坂本 昌也	篠村 裕之	佐田 政隆
佐藤 貴弘	佐藤 稔	沢村 達也	柴田 洋孝	島袋 充生	清水 逸平	下澤 達雄
下平 雅規	新藤 隆行	菅波 孝祥	菅原 明	杉本 研	杉山 徹	須田 道雄
曾根 正勝	園山 拓洋	染川 智	高橋 克敏	高橋 将文	鷹見 洋一	竹越 一博
武田 憲文	田中 智洋	田中 愛	田辺 晶代	谷山 義明	種本 雅之	田村 功一
田村 尚久	土屋恭一郎	鶴田 敏博	土居健太郎	東口 治弘	徳留 健	富田奈留也
永江 徹也	中川 修	中川 眞代	中川 靖章	長瀬 美樹	長田 太助	中谷 公彦
永谷 憲歳	中山 智祥	中山 雅文	名越 智古	西山 成	浜中 一郎	原田 昌樹
東邦 康智	人見 浩史	廣瀬 卓男	古橋 眞人	古本 智夫	堀尾 武史	本間康一郎
前島 洋平	榎野 久士	益崎 裕章	丸山 和晃	三浦伸一郎	水野 雄二	南野 徹
宮里 幹也	宮下 和季	宮本 恵宏	茂木 正樹	森 潔	森 建文	森下 竜一
森本 聡	八木 宏樹	八十田明宏	柳沢 正史	山下 潤	山原 研一	山本 浩一
横井 秀基	吉賀 正亨	吉田 尚弘	吉田 英昭	吉田 陽子	吉本 貴宣	米田 隆
脇野 修						

■2025年度新入会会員【26名】

赤星 志織	石井 聡	市川菜々子	伊藤 大樹	緒方 文彦	岡村 駿	北井 豪
倉金 舞	栗田 智子	小室 仁	蕭 捷倫	戴 哲皓	田口 慎也	竹内 直矢
舘越 勇輝	千葉 恭司	程 晨	永井 紗希	長澤 肇	永芳 友	萩野 颯太
春名 愛子	春原浩太郎	古田 里華	安田 浩毅	和田 将史		

第 29 回日本心血管内分泌代謝学会 評議員会・総会 議事録

日時： 2025 年 9 月 27 日（土） 13：40～14：10

場所： パシフィコ横浜ノース 4 階 G414+G415（第 1 会場）

評議員数：134 名

正会員数：461 名

【承認事項】

- 第 1 号議案 役員選任の件
- 第 2 号議案 次期理事長・次期副理事長の件
- 第 3 号議案 名誉会員・功労評議員の件
- 第 4 号議案 評議員の件
- 第 5 号議案 第 31 回（2027 年度）学術総会会長の件
- 第 6 号議案 2024 年度会計報告の件

【報告事項】

- 1. 研究賞の件
- 2. 各委員会委員選任の件
- 3. 今後の学術総会予定
- 4. 会員数
- 5. 長期会費未納会員の件

評議員会・総会の開催にあたり吉村道博理事長から出席人数の確認があり、定款 21 条及び定款 26 条の定足数（評議員会 90 名、総会 154 名）を満たす出席者（評議員会 93 名、総会 207 名、委任状を含む）があることから、本評議員会・総会は成立する旨報告があった。次いで、定款第 20 条および第 24 条により、田村功一会長を議長に指名し、議事が進行された。

【承認事項】

第 1 号議案 役員選任の件

今年度総会で深水昭吉、吉村道博の各理事が年齢規程により任期満了退任となることが報告、承認された。桑原宏一郎、下澤達雄、新藤隆行、田村功一、西山 成の各理事の再任が承認された。

新理事として岸 拓弥、徳留 健の各監事および曾根正勝幹事が承認された。

新監事として有馬勇一郎幹事、古橋真人評議員が承認された。

新幹事として田中智洋、横井秀基の各評議員が承認された。

第 30 回（2026 年）学術総会会長付幹事として本間健一郎会員が承認された。

第 2 号議案 次期理事長・次期副理事長の件

吉村道博理事長、小川佳宏副理事長が今年度の総会で 1 期 2 年の任期満了となることが報告された。次期理事長に小川佳宏副理事長が、次期副理事長に桑原宏一郎理事が承認された。

第 3 号議案 名誉会員・功労評議員の件

名誉会員として北村和雄功労評議員と林 晃一功労評議員が承認された。

功労評議員として市原淳弘（東京女子医科大学）、方波見卓行（聖マリアンナ医科大学 横浜市西部病院）、此下忠志、佐藤敦久（国際医療福祉大学 三田病院）、野出孝一（佐賀大学 医学部）、

長谷川浩二（国立病院機構 京都医療センター）、深水昭吉（筑波大学 生存ダイナミクス研究センター）、柳沢正史（筑波大学 国際統合睡眠医科学研究機構（WPI-IIIS））、山本啓二（埼玉医科大学病院）、吉村道博（横須賀市立総合医療センター）の10名の評議員が承認された。

第4号議案 評議員の件

木内謙一郎（慶應義塾大学医学部 腎臓内分泌代謝内科）、八木宏樹（東京大学医学部附属病院 循環器内科）の各会員が承認された。

4年の任期を満了する次の33名の評議員の再任が承認された。

安藤 孝	泉 康雄	笠原 正登	勝谷 友宏	神出 計
神吉 昭子	唐島 成宙	小松 弥郷	酒井 寿郎	坂本 昌也
篠村 裕之	島袋 充生	菅波 孝祥	須田 道雄	種本 雅之
田村 尚久	土居 健太郎	永江 徹也	永谷 憲歳	中山 雅文
浜中 一郎	原田 昌樹	人見 浩史	古本 智夫	本間 康一郎
三浦 伸一郎	水野 雄二	宮下 和季	宮本 恵宏	森 建文
八十田 明宏	山下 潤	吉田 尚弘		

第5号議案 第31回（2027年度）学術総会会長の件

第31回（2027年度）学術総会会長に南野 徹理事（順天堂大学大学院医学研究科 循環器内科）が承認された。

第6号議案 2024年度会計報告の件

(1) 2024年度一般会計

収入合計 30,389,908 円（前期繰越金 26,366,900 円、会費収入 1,634,000 円、受取利息 9,298 円、高峰賞寄附金 1,000,000 円、学術総会会計繰入金 1,379,710 円）、当期収入は 4,023,008 円と報告された。

また支出合計 4,578,708 円（印刷費 15,400 円、通信運搬費 75,916 円、人件費 1,084,000 円、旅費交通費 53,305 円、YIA 表彰費（副賞）500,000 円、YIA 表彰費（記念品代）25,612 円、高峰賞関連費 927,200 円、中尾賞・永井賞関連費 101,879 円、若手研究助成金 1,000,000 円、負担金（振込手数料）25,400 円、各種委員会・会議費 43,090 円、家賃 250,000 円、事務費 474,100 円、消耗品費 2,806 円）、当期収支差額△555,700 円、次期繰越収支差額 25,811,200 円と報告された。

(2) 2024年度学術総会会計

収入合計は 6,151,592 円（参加費 460,000 円、協賛 4,840,000 円、展示 165,000 円、広告 385,000 円、助成金・寄付金 300,000 円、受取利息 1,592 円）であった。支出合計は収入と同額 6,151,592 円（事前準備費 1,265,400 円、当日運営費 3,487,342 円、事後処理費 17,600 円、負担金 1,540 円、学会繰入金 1,379,710 円）と報告された。

岸 拓弥、徳留 健の各監事から、監査の結果、一般会計報告および学術総会の会計処理は適切に行われている旨報告され、承認された。

<報告事項>

1. 研究賞の件

(1) 第29回高峰讓吉賞に南野 徹教授（順天堂大学大学院医学研究科循環器内科）、第29回高峰讓吉研究奨励賞に小豆島健護助教（横浜市立大学 医学部 循環器・腎臓・高血圧内科学）、第5回永井良三賞に候 聡志特任助教（東京大学 医学部附属病院 循環器内科）を選出した旨、報告された。

(2) 若手研究助成 YIG 受給者に小室 仁特任研究員（東京大学医学部附属病院 先端循環器医科学講座 特任研究員）、田口慎也特任助教（横浜市立大学 先端医科学研究センター 特任助教）の2名が決定したことが報告された。9月28日の学術総会閉会式にて研究計画を発表いただく予定である。

2. 各委員会委員選任の件

(1) 2026年度高峰譲吉賞・高峰譲吉研究奨励賞・中尾賞/永井賞選考委員の選任について

選考委員長 小川佳宏 九州大学大学院医学研究院 病態制御内科学

年次会長 益崎裕章 琉球大学 大学院医学研究科 内分泌代謝・血液・膠原病内科学講座
(第二内科)

継続委員：任期2年 2024年度総会～2026年度総会まで

小川佳宏 九州大学大学院医学研究院 病態制御内科学

桑原宏一郎 信州大学 医学部 循環器内科学教室

下澤達雄 国際医療福祉大学 成田病院 臨床検査科

新委員：任期2年 2025年度総会～2027年度総会まで

新藤隆行 信州大学 医学部医学科 循環病態学教室

田村功一 横浜市立大学 医学部 循環器・腎臓・高血圧内科学

西山 成 香川大学 医学部 薬理学

(2) 2026年度 高峰譲吉賞・高峰譲吉研究奨励賞・中尾賞/永井賞推薦委員の選任について（任期2025年度総会～）

委員長 柳沢正史 筑波大学 国際統合睡眠医科学研究機構（WPI-IIS）

委員：

市原淳弘 東京女子医科大学 内分泌疾患総合医療センター 高血圧・内分泌内科

新藤隆行 信州大学 医学部医学科 循環病態学教室

益崎裕章 琉球大学 大学院医学研究科 内分泌代謝・血液・膠原病内科学講座
(第二内科)

長瀬美樹 杏林大学 医学部 肉眼解剖学

(3) 2026年度若手研究奨励賞(YIA)選考委員の選任について

選考委員長（2026年度学術総会会長）：

益崎裕章 琉球大学 大学院医学研究科 内分泌代謝・血液・膠原病内科学講座
(第二内科)

継続委員：任期2年 2024年度総会～2026年度総会まで

椎村 祐樹 久留米大学 分子生命科学研究所 遺伝情報研究部門

田中 愛 信州大学 医学部 循環病態学教室

村田 知弥 岐阜大学高等研究院 One Medicine トランスレーショナルリサーチセンター

新委員：任期2年 2025年総会～2027年総会まで

木内謙一郎 慶應義塾大学 医学部 腎臓内分泌代謝内科

中山幸輝 東京大学医学部附属病院 循環器内科

吉田陽子 順天堂大学 大学院医学研究科 先進老化制御学講座

(4) 評議員資格審査委員の再任について 任期2年 2025年総会～2027年総会まで

委員長 西山 成 香川大学 医学部 薬理学

委員 新藤隆行 信州大学 医学部医学科 循環病態学教室

委員 徳留 健 横浜市立大学 医学部 薬理学

3. 今後の学術総会予定

第30回（2026年度）学術総会

益崎裕章会長 琉球大学 大学院医学研究科 内分泌代謝・血液・膠原病内科学講座
（第二内科）

2026年12月19日（土）沖縄県市町村自治会館

4. 会員数

2025年8月1日現在

一般会員	327名	（年会費 3,000円）
評議員	115名	（年会費 5,000円）※理事・監事・幹事除く
理事	14名	（年会費 10,000円）
監事	2名	（年会費 5,000円）
幹事	3名	（年会費 5,000円）
功劳評議員	123名	
名誉会員	36名	

会員合計 620名（2024年10月8日時点では628名）

参考：休会中の会員 49名（上記に含まず）

5. 長期会費未納会員の件

連続3年間の会費未納者（一般会員14名、評議員1名）については、前年度末（2025年3月末）に自動的に退会とすることが報告された。今後も3年以上連続して会費未納者で会費納入にご賛同いただけない場合は、自動的に退会処理することが確認された。